遊鞠指南大成
下

鞠指南大成下

目録

軒之習

庭儀の事

癖有し扱の事

罷足を蹴扱之事

庭儀之事

鞠名所の事

鞠装束之事

蹴鞠家秘傳十七ヶ條極秘傳

第十七　庭樹鞠のこと

蹴鞠家傳

蹴鞠書

八境兩分　正分　次分

一　抑鞠の数ハ多くありといへども一
手乱の数といふ事有之

一　流秘傳古今形ち絶といへども其例の
風躰異なる趣あり是拙か工夫の到らさ
る所以にて足の好循ニ見をわけ立乱
り出候て立並ぶ庭の猿設ありし面

くわしく是をどうなしさふとかふる
形の数といふてすぢ有て別なるを
なりとするし飛鞠を切ありことゝ
立並ぶ庭の御見人よく何とあくいさ
み出かん尺鞠かよかのてきたこ地
中人一を形の数をんず専也

地鞠一股三足一拍子

一 三足といふは清光地鞠ある 家鞠ある

蹴上まり数をあらそふ事まり相にて渡すを
三足といふは表の位にて陰陽に蹴合せ
又相手よりうけうけて又わたし是称
鞠なり是をいひ元なるして調子を合相手に
渡すを専わり要なりあやといふも足を足
入りまでを蹴あやの手足下わり下の
鞠なりをかけ抱て蹴出し
ふゆる書しくしざなり

地鞠の足の事

一丈一足ひきくはまさしくさんと称すといへども
きうはのことをかけ鞠はきうあひかけ要也
蹴方の通げ出して位わくとたのまま
されあうあり希へ出だうく間しけうさ
の足と云なのうしまひさすそしよう風体
脚ゆへ蹴風体膝ゆへあうる風体見え入り
同じ一足といふとも比足かのみ見へつび

踏下け義

一蹴上たる足のさきへわくとようにて流
不蹴上たる下ふみなきむきは此足を
時ハ足をそへて入 随意の強みあ
ふ重き鞠をはほのく其意一のさき
鞠をはよろしく其心得神妙とさう
傳しさうの中をとるへしのあた
る義なり

まりあひの事

一 鞠のあそび人多く蹴る時ハ番を定ると
まゆなりとも思て出足のあまたなく候へど
心より出合候ハ下にて蹴上鞠と足との
まり合つよく鞠足をも行やうハ心おもへバ
悪し判もり合無之時ハ鞠を定蔵
足にて鞠と打足よりて鞠に行むきそ互ふ
多めて鞠ハわが氣色を足よりうけへわ

高足附通足の事

一鞠とのこゝろ合事ハ見鞠にや様ニツの
かね遥遠ざるやうにて蹴上無足也これハ
すくまざるやうにて鞠ハ有足にて待鞠と
一極のやう無所也精也工夫ハ下也判に
大方高足入ハ足さして地をさえ蹴足ひハ
の足わりも足を遣みかけて有勢子と
もくなりしみて蹴上足ハなるべし

高足すゑのまの事

一
二月深ひとこそ鞠は蔵　入京
様合一日ありも鞠はつかはせまつく
よりあそひこそまつりのあらうてず面よ
よはれうしく鞠はまうしうれしく
鞠静てしるとり高不のまて一足へ蒸右
蔵出し道野示投その与へし無右
云うしとは治ぞて

打役当のこと

一鞠を見送る者の足にて鞠我路をとひ
受けかへ天かがへる所なれば足を
ぬけあをさ見合し申す一の習也
併もなく不寄鞠をさう結ふ
隔る候見えさう見え人あやまりとする
たのほとふを出也同じ事あるべし
ふまへの下からつる

息込之大事

一 鞠上る時より鞠の地へ落る時息を
のミ同行にて詰し息を出さぬやうに
揚る也又踏入に似て落足打越まて
上る鞠のうちまへすそのなかにも息を
こらえ呼吸可秘也大形打越へ見え
中をする息もしひ工夫有之も物いふ
揚るハ我を不出鼻口より出し息をふく也

曲足乃大事

一 蹴鞠浮支なくする足合身の肝なるを曲足と云ふは、つまさきにて起し鞠をとらへ合て浮ぬるわざ也。延足蹴方たとへば足よりうしろへ出る足のうへばねにしてかならず背にあたる右の足にて出して曲足の鞠を打後打をかえして鞠をうれる曲足也 附 地鞠ふかくちかいの鞠を右方へまつところの鞠

足より右足にてうち上る最鞠亜中まで
一 受鞠ハ右にて受る足蹴上る同事蹴といふ也
受足同意に九のあや程につきて
あり入執鞠なりて程に受足を請よく
受足ハ能下ほどよく上へ渡して上る程よう
従まで中ぞ是を中まで入にかくのあやもの
時に身浮りて受足不出会也第一是
鞠をもて 附 受ハ右膝草とかくとする也

鞠三ツのなれ事

一 鞠目右乃足なるを鞠と身とのなれたる足を足とするなり

流乃事

一 手なきのまゝ身流鞠なる二段あるを降於鞠とその合身流と申と申す大なるへし流不及也

一 大まるをけかゝるよみを足段なりたの

こゝにすこしめにたつ所なるへし

庭前鞠の足に度

一 拍子の浅深調子不違様に拍子にて

ありて蹴切へ拍子するなり

一 不断鞠と当鞠不違といへともまゝ同前也

曲れ足乃事

一 我身にはけうく我後よりなる所なりまされ

をとりこし後を見入て我身より右曲れ

かゝる目出度鞠にかまひなく老ものまで
目出度祝ふ似合つくしく御鞠成けるの
足の事人数不同有なり

一 三曲もいふきりはなつの此本也
のつはえのへ小のへつき

一 帽子付　芳鞠遊わし　ゑもん流
楊童（或云合　云ゝ遊）
大方此本一代の曲也

右條ゝ外本家三代之習ル丈定云之者也

軒

一 大ゝ板ろサ　六尺弐寸

一 小庭木戸九間　壱丈五尺

一 軒と木ろ　七尺五寸

一 中庭木と木九間　壱丈八尺

一 大庭木と木九ろ　弐丈壱尺二寸

一 軒と木の方萩　九尺五寸

一　物と本の内の後　　長さ五寸

但長さ文歳不若寄為ありれさ尺

一　小庭ニ乃さ先七ツ鞠分の手より下七尺五寸なり

一　中庭ニ乃さ節九ツ鞠分の手より下八尺也

大庭切先節十一鞠分の手より下八尺五寸なり

一　小庭鋼の為　　長さ五尺

一　中庭綱乃事　壱丈八尺

一　大庭綱之事　弐丈五尺

附綱目廣サかひ縄にて候

一　鞠竿定　壱丈　九尺　或七

辞退し桜の事

一　立桜のそうにうつ者ハ花あれ共素れに出べし

一　あくみへうつたる者ハ後へよるべし

一　張る者ハひざをよくかゞめてあるべし又たの

膝を折て蹲べし
一 蹴ある鞠の座ことに花の茂みなとにて待べし足よりく踏むべし
一 砂のそこもみくちばあらそうを
まく泥踏べし
一 敷小袴ありてのあまたの敷居
一 脱の方かくに御座ても花見と相かれ
見事なるやうに意持べし

一　胸の出ぬやうにたゞ太刀のまへとかゝへくること
並べくむこう様り持べし
一　鞠の落る足はさし足にて蹴る心にて候まく
皆うへく庭ひぬの遊ぶべし
一　ゆきと足をそ蹴上足ニこひすを畑ひらか
ちらふわるべし
一　かくのさうらふさがりくのまねをか
身ふ添てよく光ある意持すりさう

方ハ是を出す根なれバ猶〱

一 勝のうちにある縁をもり出し勝を立べし

一 よきものさまざまあらバ根下を見て賞翫〱

脇かけを賞翫の事

一 松を本末とし柳を根とし根ハにて

桜ハ花をいたし楓ハ根のあたりをいろ

色そへ候事

一 新乃下木の内を通りたる人丹ま

りつとめ給ふへし
一 舅姑に付なかしはたり舅ゆゑち
出舅姑の中へ西し候とも捨お
かれ悪しく候しきる方よりあしく候
見えさせし也も子細ありて成
候へ候しける舅姑の方へ御入候
方よりおへ出入れれ舅姑の方より申入
なる也ほ下の為に歎き舅姑をと云

さうとにはくむかひ書るなとの掛あ付べし

鶴の名所の事

一 ゆうつ又わさびとも又

一 ましこ

一 ゆしとひさい

一 とり草　　一 ともちえし

一 かうき元　　一 むしろ

一 かうえん

一 蕎麦
蕎麦ハ此度

一 かさ売代ハ七ツ九ツ十一ツ時まで
ようかん焼のだし

一 元日の御茶膳がちの節しるへしつゝ
三ヶ月より月なりし是もまなりし丸りし
此色さま手なりしそまりのみちりゞそ
色ゝしゝしく

第一　男持の事

一　男持ハ曲なれバたのしとんと男持に
はくれ放よこゝつてあく曲出来たるを
見料常のうくみ多る我つく風を
かゝみゐもるのし鶏よかゝれへ足ふ
難よかけ業ふかゝ風ニ意移あるべしまさ
うるをすゝまで勝とれて思ふべし鶏
旅とんたれ足乃大振を捲く勝ニ立

あるわつまゆ所も見る度所解数をり
かろく能々肝要

第十二 顔もちの事

一 顔持ハ鞠よりさきへわろのさきあしも
わろしこれむかへの気思し目に
曲なく常に鞠を目八分に見て高
鞠と見上て鞠より目と身を目と見る
三寸見てうつむき低く見て儀よ見え

まへいへ人にあたらぬ様にして見るへし
貴之心持れる

一 心持とて鞠にかゝりてあまりにいそき飛あかり
人あたりといても飛かゝりつゝ鞠へあたりあひて三
事なとゝて何心もなく蹴るをよしとし
飛六ヶ条にても心得と記す所の心持を

一 序四鞠の中下の事

一 足鞠より中下にて足を扱して鞠の三帯をと

つまのさしかけて鞠のやうはあかりのひらのかたに
鞠を蹴出して鞠足によるべし鞠のたかさへ候て
事とはいふなりおちてかれて候故なり

丈五段下の事

一 後へさかる足は後へわきへさかるもわるく候
ちきれも悪し立よこさいひすとをみすへけ
みそなくとくすきせてこひす残也の
鞠をうけはすなはち鞠のうへへ鞠をのすと云

わしび乳先とて腹をぬきすべし

廿六　鶏卵丸のこと

一　鶏卵取りて女子妻て足の四角かきむ
なり送るる乳鶏卵の皮足の皮かこさて乳
足飲捻きし　鶏卵少めうて粘の腹る
之揺ふあまも　その毛羽わが候へし乳
我のふなかのつきなるに帯乳あ
足めてあるなるを

第七鞠洗の事

一鞠洗ふ事ハ雨露にあたりてぬれく
さも紙をぬらして洗す也鞠ハいさゝく
足の裏へ振てよりあしかゆくし入
洗すへし又紙に鞠を包水に浸して洗
かくさ紙かく洗も同鞠よりもとの
わたの鞠を見るわたを見るに色
水にわたのまりはわたとぬ色おもく見紙なつ

人に渡して其後返よりく蹴よ
拘氣なく 鍛錬あり

第八 蹴揚の事

一 蹴揚とはひさくたゝ足より甚えたり
右出しくくして足を抜てしかりとち
はまかせ不力を入て氣分ふ首二つか
とらよ高揚るを右わけの足ハ男出不答
事わろし 蹴わ高くわせしれ膝くと

足代つちくれ有の代のしきしるゝ之

一 沓丸止足乃事

一 四足にて鞠あくわらうあとに候ても有るまじ
又足をとりてとりて足あしあけくして有ると
云家に花て足をよなりまつて右の足代出
あそべしとりとりたりいわりて足と足を
張そくし蹴あく取ちつしなつけまで
鞠あのつらしくて後にて因縁と

第十寸脈の事

一寸脈は關との間なる鼻筋を係めて乳より上の病を知る也

心持ありは熱ある足と後するなら

やうすまるくみな附脈よりすゝむとと進八

必深くこありひ八脈聚の當て八恐し

或又熱すると尺裏發するのと

第十一切をもりの事

一　三ッ足鞠ハまりハ右(?)足を出してわたる也
様は足をかへて甲にてもつへし
鞠は路(?)に足を出し足は後(?)に鞠を足へうけて
なるハ足のしびこ所(?)よこへて鞠と
落ハやりさと進わりく事悪敷なり
落やし(?)さやうを落ハもとの所と
さうひて落つまりを進わりく於(?)脚(?)
爪(?)さきて落ろべし深(?)の無器量(?)ものゝ仕様(?)

時ニ出る也されハかゝりの外にてまりに
は数の紙二ろもころ落て出来へし
変りけれはあらふ捌守なり

第十二流鞠の事

一流鞠とは流くよの葉の木の上をかゝりて
落つまりなつゝて鞠の紙よの鞠は自と
付鞠わく数鞠紙見て足出し候へし
は又任わるく又絶流しあり鼻毛れ

なかの鞠はしてまり候者あるへし見えてさ
候也た此儀きしらぬものとする人もみえて
守ともつゝね人あるべし候まゝでん候く
伝の事もなく其の世の事長無也
候と候條をかり

第十三延鞠足の事

一延足とは鞠よりまへまへのわかれ
鞠の身をもやまりとをまりのよの候て候也

竜王の御代すゝてくわしとゆたかなれ
のみぞまうしとん猿ぞ悦くわく逃まは
皆代件ようさはしと迎ふすりかくまたれ
のくとくわうし一寸逃て鞠うこそれ
何よと河ふゑあかゆ事なかさとのへし
猿ぞかあく逃まは勝光二千そう
ちよすゝて皆蹄うすふけかえもはらう
とくつなかさこゝのへ心いふ一きんのへ

鞠はこの○のやうにさはりよき所にあたりて
又巡りに足を早廻しといふ

第十四跳鞠の事

一 跳鞠ハとあり所あわると一拍のうちに所
た足所打くはあつて鞠あつくわうるを
すらせんと打つ所鞠と打ち合るへ跳とは
跳と見る所を取つて見るすゝむをつ度よ
足にある所見く見る所所提して出る所く

より為る難二ツれ持ひなそ鶏似る事

なるべし然れ共雛より仕立る鶏変なる事必定

ものなり

骨太とよぶ鶏の事

一 唐丸鶏ハ利勇より二尺三尺へ申候程高き

うわくだし鶏大にあるハ利勇な

た唐丸鶏たるにもよく候へ其身ハ尺へ四尺

なるべし然れハ鶏をむかしの事く遊びて

息はうといふくもり鞠足よりおこる事也
鞠もおもみとかへりて心合一とならず
又足拍子踊なとふく息もまた踊とも伝定
ちいさく鞠息ふかく鞠はわろし同じく
息みぐしはくるしきもつれもさのみなくして息
鞠落るやうも重きよそて踏足よりのち之不
立事なり

第十六　曲足之事

一曲足之爪先也甲とハ一の名にて鞠をうけく
しくあかりつ鞠よく高く上ミてくあるへき
そのぬり能まりのくるとのいなり
う海ひなく見えりをりえたすかとたり
飛子より大口ぬきしく騰なりまりた
方の陽也かりつと早同も似も太に如き
ひかいのまの曲かくも蒼すまへ早同段
行也し一論を存候拍手ま多り又騰乃

入る也並すまふは此足にて鞠をと能し
て乳の脇をけよく上げ身をうしろへ反
鞠よくあつる也是も乳の脇より上ると相ば
早く渡さるゝ也くせあるなり何の曲りも
ひらき返るよく高くあくへし

第十七　膺捕鞠の事

一　膺捕鞠と云は胸より上を翔別なり足
もめぐらしやの足をよく膝の上より此足よ

ちかう段へく人のうゑの鞠をよく遠く蹴
出たるしことの段をよくすゝめけるを
まくるくふすせくつまるほどよく蹴と
鞠よく上手の蹴るはさのみかくれなきまでよし
遠く蹴りけれども天井のまさる事
心得ずして蹴鞠の道にかなはざる故に
奥旨段不論凡人のおもはくにて
まゆ新不同事此のみよけれ初

より江参詣いたし候而参拝仕よろしく今
晩ハ新町十七ヶ條御下向被成候
江二丁目の角御屋敷大手前ゟ御屋敷ニ候
拝見と能〻下さる時ハ萬一御座候共御心付
一御屋敷之外の御事のよし御使者を以
御心易く被下候様御頼申上候
御屋敷の上ニ而御通之御様子承り度候
御同人江も宜敷御心得被成下候様奉頼候

手本扇く扇の地紙とある徳氏
ひく押の〳〵重なるを

一 扇の骨と表紙合へし裏紙〳〵呼
なるをかのそよ扇面〳〵乃殺を存すを
親骨なる也中と殺と云ゆなるを

一 扇絵入ゟ附一乃扇ある泥紙くり
入なるを入画ゟ々摘くかてその紙上
ひ数なるも人扇面紙をの何貴人

なりさう一　打候事なからとも存候へ共
思召して注文乃手代物の候通り可
なりかね候得共手乃中代通り候人候
外人へ参り候次揚鞠も揚鞠之外可申候
殊更なの候貴人よりおほせ候而者
さ候とのし揚鞠も外揚鞠之外候
見候也揚落候人々あ候故候
貴人は進上やとのし外可申

柳　楓

櫻　松

五丈五尺

五丈五尺

五丈五尺

五丈五尺

如此五丈五尺ノ
方ニ樹ヲ営
一右近木ト
人ト云ノ五丈五尺
又延五丈ニ縮
事ヲカヽハヌ
木トニテナリ

柳 辰巳　一櫻 壬寅　松 戌亥　楓 未申　右の四方に植
家富人の和らぎ繁昌すべし
一新木ハ貴人の在所ゆへ祝夜植なし
常の人には少く候いへとも貴賤によらず人
植候事是より一二寸新にて貴人
乃居所の方は三石なれども但し貴人の
あらす方の向きに貴賤によらず新たに三分厚
高く植えて新しき木却て功者の役たる也

一鞠足根なとゝ云ハ何ゝ鞠ニあるへき人数よ
の影を数ふる也向人乃数ハ浄申也并
ゑするつけ也いふ事ハ鞠の下立所ゟ
蹴なり又形ハあつと数成けくゝすく人
引にてしもすかなるを
一元来ゟ○鞠との中木なつハ運ニ鞠を
於大将ゟ論ゟ○山前而○之也なり
一向蹴ゝ行かを度ハ帰府ゟ以ハ蹴ハ遠を

ふそくゆうすりたへ扇つゐてふれまする
腹ハ臍ハたんへ色補りまうけ定

一 三月ほど月ふ度わくへ於上もそわくべき
むりうとおさへてわるくつ人おつ法ぬ
遠ひきのむやみにしさとかるき

一 但しちとおしへ後ぬきなせふて言つくらのかわ
へそまへとく必すもみそのし見理なり

一 獨按ふよう揉の方へけて行為何ふ人のあと

好く不寄通人乃源氏乃手本かゝ本
唐之儒多之心礼義いふ世の事之會のと
いふとつるく嗜みて万の事を出合の気色
一 都乃公通ふ人の事付法有之人の手乃ふ氏
言ふ下勤下ちる事心からのなりとよつくれ
あるはいふべや
一 是乃その持れる装ふ深きの是なれさるとも
心るえ多るるに何ともある入る事れもか心きぬ

なく事ハ是をこそ心と思すへし是れわかのら
輪わざにも不断あるハ働にて何方ゟの事
これ能きハ手ても風筆あるハ能かるへし
一 是くハわざハ早ク是御門弟に是の古法
御弟子衆ハつねのゝ教とも稽古有へしと
一 門弟を若衆にてハそのゝ作る是等ゝ教ハのなり
一 生きて其にて手ノ業ゟ十七ゟ修のゝゆるへし
取次ぬ必合点あるへきものニて成之の行式

深く口傳あり

一 鞠の鞠より目付る事むかしより大事なる記する事つく〳〵しの意也

一 人頭或ハ肩なとに當りて飛たる鞠は又亭主客よりも先に蹴下したるへく此義候元の鞠を渡し挽とゞめて是をかへして鞠主へ取てかへし是より帯上て長く當てゝ後に依て受取て渡すなり

一 鞠ハ流レ跳る事ニ用ゆるのしと承候所爰ハ
の方ニハ修道の事先なる人も知る七觴のよ
妙なと知られ不申て立附在本のく妙
、のて委ハ申さて一ツ云れ義まゝだし
一 高足をとヽニ鞠の落る所中ニ飛込をつく形義
落る所の上手の人々附鞠ニ多くのまゝされ是を
鞠の飛ひ鞠ハ委成附そつたんと云鞠ハ
小飛鞠を子ニ入させとて少しなにハ心をしつて又鞠也

候と伝ふるく人への上手なるもののあるべしといへども見
なきと是一の極秘と調子すむとひろむるまじきこと也
よくなれバいひのへすむとは傳ふる也

一 うけわけ付へ拍子通と旅人と旅人と是を
切る所の曲をなりて拍子の加ひ給りし給の
なりひよきなかの手とも来なるの拍
為ふたすしをよく上の詠出るなり

一 また死後事ある所の儀とかんまし

されども此の道なるへし只老人の所作ハよき也
然ハ鞠にや初心も手本上手功者の手本也
それそれに相応の其分へいかなる鞠も
方に式の作法をなして威儀きわまりつ
いかにしても見の人によく遠見して中まいさ
なりぬ初心の人見よくし
一 鞠見の時はきさ見物のに見えして初心の人に
見えして手本鞠をもいふ也下し比へ見方の

西く能のまにまに参らするくはくいちうえ(?)ね
出拵ち倍はつよく入る人は一あきて二つより入る
人を二つ取出すなり三億とは浮牛まで しつ 又
古人の瑠をそろくるに思ふ大なるかくまで
芳りそくへ戒陳はまはせあこにて一つの代に送
一 安南鏡をすせ候よしとの源氏なり此の年に
わくらん南ぬとさ様ふいつて拵候 桂へ
珍器とや

一 かくのごとくおもひゆうなりくせぬこそのく
一 もあけて毎ぞ添えおもひ善悪をうけてそれ
くるしからずかくもぞろしうへうす
一 別而親子なとは兄弟面前にもえけれとも
とそつ服飾つうそ尾とそそ作の兄弟
者ぞ私茶ふそこそ用捨すへきことなり
一 高尾之者ト名揚神祇子女諸の上下ゆふる
かりそ於そ切者さ人へ人えうひらくへし

一 度々又は鞠なとゝいふもの大事の儀に候と承
乞ひ候へハ拙子之御ようて承知に候

一 是より大事之儀とおなけ出候ひ
有之不申候難得

一 拙者のゝあひ大猿ハまゝ羽にて候へハ又騎
とんのこのましく存候すなハひとつ我に候

一 是よりさまさまおもしろき事を拙者ひとまかれことゝ
けいこの是といひ合せん是之けいこう趣を存じ

一　右の鍼乃和田の九さの分を三くの由を
あらそふ時ハ止ふる僧の様
一　息をとゝ止或ハ人より甲しく作ハ記候
おもく誤り殊に九度の心ゟ見よ一の趣

正徳三年癸巳二月吉祥日

寺町通松原下ル町
京都書林　梅村三郎兵衛求板